

## 6例のAnorexia nervosa にみられた盗みについて

著者	深澤 裕紀
雑誌名	浜松医科大学学報. 学位授与記録
巻	6
ページ	54-55
発行年	1988-11-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/1330">http://hdl.handle.net/10271/1330</a>

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博論第 53号	学位授与年月日	昭和63年11月11日
氏名	深澤裕紀		
論文題目	6例の Anorexia nervosa にみられた盗みについて		

## 論文の内容の要旨

神経性食思不振症 (Anorexia nervosa: An.n.) の患者に盗みがみられることはまれではないが、その意味は不明確なままである。本研究はAn.n. にみられる盗みの意味を精神病理学的に考察したものである。

対象は盗みが観察されたAn.n. 6例 (不食例4例、過食例2例) である。この6症例に観察された盗みを不食例、過食例の間で比較対照し、本症の病理との関連性を検討した。

不食例における盗みには対人的な愛情欲求が考えられたが、過食例における盗みは愛情欲求と共に過食に伴う行動としての食欲さの意味があると考えられた。不食例では盗みの出現によりけちな態度が軽快したが、けちな態度は病的な自己防衛と考えられ、盗みによってこの防衛が打破された結果、症状が改善されたものと考えられた。しかし、過食例では、盗みが出現した後もけちな態度は軽快せず、食欲さの心性が顕著となった。盗みを隠れて行うという秘密性についても差異が認められた。不食例における盗みには秘密性が強く認められたが過食例における盗みには秘密性が乏しかった。秘密性は象徴的には独立 (自立) 欲求を意味することより不食例における盗みには自立欲求の意義が考えられた。結局、不食例における盗みには愛情 (依存) 欲求とともに、それとは両面的な自立欲求が想定された。しかし、過食例における盗みは秘密性が乏しいことにより自立欲求が乏しい単純な愛情欲求であるといえ、食欲さという単面的な志向と同様のものと考えられた。

An.n. にみられる盗みは依存対象との危機的状況下において起こったが、飢餓が準備状態として考えられ、そのため食品の盗みが始めに起こるものと考えられた。不食例では、入院というそれまでの対人関係を遮断する状況が盗みという形で愛情欲求—自立欲求を顕在化させたと考えられた。これは依存と独立を主題としたものであり、自己同一性確立への方向づけとなることによって盗みが治療への契機となると考えられた。不食例においては治療への転回点に出現する象徴的な現象として盗みを理解することができた。しかし、過食例における盗みは愛情欲求—自立欲求の意義はあるものの、過食の心性である食欲さが盗みを単なる物の入手手段に変化させてしまう結果、盗みが遷延化し治療への契機にならないと考えられた。

## 論文審査の結果の要旨

思春期に好発する神経性食思不振症 (Anorexia nervosa: An.n.) の患者に盗みがみられることは従来、散発的な症例報告や総説が発表されているのみで、その臨床的あるいは精神病理学的意義を検討したものは、ほとんどない。申請者は主論文 (6例のAnorexia nervosaにみられた盗みについて: 精神神経学雑誌 88: 421-437 1986) において経過中盗みが観察されたAn.n. の入院自験例6例について、これを不食を貫徹する不食例4例と過食行為を伴う過食例2例に分け、An.n. 臨床経過中における盗みの発生時期、種類、その精神的ならびに社会的背景について、症例毎に詳細な観察と精神病理学的考察を行い、不食例において盗みが治療中、治療への転回点において出現し、治療への契機とも考えられる象徴的な現象として理解し得るに対し、過食例においては、盗みの発現時期、内容などを考えても、盗みが遷延化し治療への契機とは理解しがたいことを見出した。このような特徴的なAn.n. 経過中の盗みにつき、その患者背景、症状、ロールジャッハ・テスト、予後について統計的検討を行うべく、DSM-IIIの診断基準を満足したAn.n. 28例 (不食型18例、過食型10例) および体重減少が少く自制困難な過食行為を主症状とする過食症 (Bulimia) 7例の入院例を窃盗群と非窃盗群に分けて検討し、その結果を副論文「Anorexia nervosaとBulimiaにおける窃盗について、臨床精神医学 17: 375-383, 1988) に報告し、主論文の小数例で認められた傾向を、より多数の統計学的検討により立証した。

以上の経過より、主・副両論文の内容が一連の研究経過のものであり、論文審査に際して分かちがたい点も多いので主・副両論文を併せて審査対象とした。

全対象については、平均入院期間 112 日、平均追跡調査期間は 1 年 8 ヶ月であり、性別では男性 3 例、女性 32 例であり、以下の結果が得られた。

① An.n. 不食型では 6 例、An.n. 過食型では 7 例、Bullimia では 2 例において発病後、窃盗がみられたが、各病型の間に出現頻度の差はなく、窃盗が An.n. 不食型にも、まれではないことが示された。窃盗群と非窃盗群との比較の結果、窃盗群には孤立化、過活動、けちを呈するものが有意に多く認められた。年齢、発症年齢、罹病期間、体重に差はなかった。また An.n. の改善・治癒した例は窃盗も消失したが An.n. の身体的特徴である体重減少率、無月経の発現については不食型、過食型の間有意差はなかった。

② 窃盗が起こった時期については全例発病後であり、1 ヶ月以内に消失する場合を一過性、1 ヶ月以上つづく場合を遷延性とする、一過性の窃盗は不食型に多く、遷延性窃盗は過食型に多く、統計学的に有意性が認められた。An.n. では食品を最初に盗む者が多かった。

③ 窃盗の発現と予後との関係を見ると治療後窃盗の発現した群では全例が改善しているのに対し、治療前窃盗出現群では全例不変であった。この傾向は治療に反応する時期に窃盗の出現する群の予後に関する主論文の症例と一致した。また An.n. の改善または治癒した例は、窃盗も消失したが、過食型では過食の嗜癖性のため不食型より遷延化する傾向があった。

④ ロールシャッハ・テストでは、窃盗群に人間運動反応 (M) が有意に高かった。また形態色彩反応 (FC) が低く感情の処理が未熟の傾向を示し、全反応中の人間像の反応の割合 (H%) が高く、他者への関心の程度が高い傾向を示した。過食群だけについてみると (H%)、良性形態反応 (new F + %)、および非現実的表象 (Caricature) が有意に高く、動物運動反応 (FM) が有意に低かった。これを要するに、窃盗群にあっては、他者への関心が高く、内向的・観念的傾向を示すが感情の処理が未熟であり、活動性が低く、現実回避的傾向が認められ、過食群ではこれらの特徴のほか現実吟味力が非窃盗群より高いことが示された。

⑤ 以上をまとめると An.n. の窃盗は孤立化した対人関係のため愛情欲求が歪曲した形で表出されたものであり、ロールシャッハ・テストに示された内向的・観念的傾向、感情の統制の不十分さが関連しているものと考えられた。

この結果に対し、A) An.n. 患者の窃盗と思春期の少年における窃盗とは如何なる差異があるか、B) ロールシャッハ・テストの結果は思春期窃盗少年における結果と如何なる差異があるかの疑問が出され、申請者は文献の検索を行い、これを自験 An.n. の成績と比較したレポートを作成した。

その結果 A) に関し、An.n. の窃盗は 1 人で行い、食品を盗むことが多いが、非行少年は共犯が多く、衣服を盗むことが多い。An.n. では心理的因子が主であるのに対し、非行では状況因子が主である。An.n. では愛情欲求と自律欲求をめぐる同一性確立の葛藤と言う共通性があるが、非行ではその心理的意味づけは各個人により異なる。B) に関し An.n. では H% が有意に高く、FC が低い、全反応中の人間像の割合が高いことにより非行とは異なる。窃盗行為についても、非行より愛情欲求の意味が強いことを特徴とすることを内外の非行に関する文献と自験例の比較において証明したレポートを呈出した。

本研究は、従来その意義づけのほとんど不明であった An.n. の盗みについて精神病理学的検討、背景因子、臨床経過と治療に対する反応との関係、ロールシャッハ・テストによる心理的特徴を明らかにしたもので、とくに不食例治療中における盗みの発現とその予後に関する知見は臨床的にも重要なものと思われ、医学博士の授与に値するものと審査委員全員一致で判定した。

論文審査担当者	主査	教授	五十嵐	良雄		
	副査	教授	大原	健士郎	副査	教授
	副査	教授	森田	之大	副査	助教授
					佐藤	愛子